

Report on the Villages in North China (11) : The Hebei Province and Shanxi Province Villages in September 2015

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44915

華北農村訪問調査報告(1)

—— 2015年9月、河北省・山西省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、これまで中国華北農村においては、2014年度までは内山雅生を研究代表者として山西大学中国社会史研究中心の支援と協力を得て、主に山西省農村において聞き取り調査を行ってきた¹⁾。一方、筆者を研究代表者とする科学研究費助成事業による河北省農村における聞き取り調査は2014年度から本格的に始まった²⁾。そして、2015年度からは、筆者の河北省農村調査も内山雅生を研究代表者とする科学研究費助成事業³⁾と合同で河北省と山西省において農村訪問聞き取り調査を行うことになった。

そこで、今回は、9月13日(日)に成田に前泊し、翌14日から中国(河北省保定市S県・Q県と山西省L県・H市・H県)の農村を訪問して聞き取り調査を実施した。また、その途中の19日(土)・20日(日)に保定市内のホテル(華中假日酒店)で開催された国際シンポジウム(中国社会科学院近代史研究所と河北大学が共催する「華北城郷与近代区域社会」学術研討会)に参加して、日本側からは弁納(基調講演)と祁の2人が報告した。さらに、24日(木)、L県から太原に移動し、同日午後、山西省太原市の山西省立図書館において近現代中国農村に関する文献資料を収集し、28日(月)に帰国した。

今回、日本からの参加者は、弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・盧珺・菅野智博・安地雅博・鄭翠梅(東京学芸大学大学院の研究生で、今回が初参加)の計8人であり、一方、山西省の農村では山西大学側から毛来靈に、また、河北省保定市農村では河北大学側から鄭清波に、それぞれ協力してい

ただいた。ただし、田中比呂志と鄭翠梅は後半の山西省農村聞き取り調査のみに参加した。

なお、本稿では、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として常用漢字と算用数字を用いるとともに、敬称を省略することにした。また、プライバシーの保護の観点から、訪問した農村における聞き取り調査にかかわる人名・地名・固有名詞などを伏せることにした。

Ⅰ. 聞き取り調査－河北省保定市

今回、河北省保定市では、主にS県G鎮W村とQ県Z鎮Z村で聞き取り調査を行った。保定市街地からW村に通じる道路がしっかりと舗装し直されており、前回よりもスムーズに移動することができた。しかも、新農村の「W新民居」ではなく、元々の村で話しを聞くことができた(初日は、2015年9月から北京師範大学へ交換留学したばかりの金沢大学国際学類の学生の和田友美と佐々木麻衣も参加したが³、同農村のレストランのトイレにはかなりショックを受けたようである)。この時期は、天気予報では降雨が予想されていたが、実際には小雨にとどまり、また、すでにそれほど暑くはなかった。ただし、W老年活動中心で話しを聞いている時に、参加者の多くが蚊に刺された。また、保定市内のホテル(華中假日酒店)から車で1時間弱のところにあるQ県Z村については、今回、半日だけだったが³、初めて2人の老人(2015年9月現在、92歳と90歳)に対して聞き取りを行うことができた。

(1) S県G鎮W村

聞き取り対象者：LSS・YHM

聞き取り日時：2015年9月15日(火) 11:15～11:45

聞き取り場所：W老年活動中心(W幸福院)

聞き手：弁納才一・祁建民・古泉達矢・盧珺・菅野智博・安地雅博

通訳・記録：盧珺

LSSの個人史

- ・ LSSは、子年(1936年)生まれの80歳だが、今回はほとんど話を聞くことができなかった。

YHMの個人史

- ・ YHMは、申年(1956年)生まれの60歳で、(かつてのW県?) 県城の高中(高校)を卒業した後、同県水利局で主に「打機井」(電動ポンプで水を汲み上げる井戸を掘る)の仕事(「機井隊」の月給は18元だったが、その他の各種の手当てが付いて、計35元を手にした)を1984年までやった。その途中、1976年に唐山大地震が発生すると、唐山へ行き、半年余り、井戸掘りの仕事に従事した。当時は、深さ20mの井戸を掘ることを求められ、汲み上げられた水は全て「好水」だった。ただし、1979年の改革開放路線が採用された後は、「機井隊」が改組されて首を切られたので、1984年、本村に戻って農業に従事するようになった。

村の概況

- ・ 2015年9月現在、本村の土地のほとんどが請負に出されており、その年間の請負額は、1畝当たり1,200元となっており、その農地の大部分を請け負っているのは、S県城内でソーセージの皮(「腸皮」)を作っている大企業である。そして、同企業は、農地を請け負った後、人を雇って農地に水をまいているが、1日の手間賃は1畝当たり50円で、玉蜀黍が生長し始める頃に一度だけ水まきをし、その後は主に雨水に頼っている。
- ・ 2015年9月現在、本村における夏作物の玉蜀黍の買付価格は、1斤当たり1.15元だった。また、本村では、一般的に、玉蜀黍と小麦の2年3毛作が行われており、9月末に玉蜀黍を収穫した後、10月1日前後に小麦の種を播き始め、翌年の6月に小麦を収穫した後、再び小麦の種を播く。
- ・ 2015年現在、自分の土地(敷地内?)で養豚をしている家が1戸、養鶏をしている家が2戸あり、毎日、村外から鶏卵を買い付ける人が1斤当たり4.4~4.5円で買い付けている。
- ・ 2015年現在、「澆地」(灌漑)用の水も「機井」の水で、「機井」も土地を請け

負っている企業の所有になっている。1つの井戸で、60～70畝の土地を灌漑することができ、生活用水として利用することもできる。

- ・以前は、飲用水・生活用水として水道水を利用していたが、水道管が壊れた後、修理されなかったので、改めて井戸を掘って、2015年現在でも井戸水を使用している。これは、村外の人に深さ40～80mの井戸を掘ってもらったものである。一般的に、井戸は、深ければ深いほど、水質が良いという。すなわち、深さ40mほどの井戸の水はそのまま生で飲むことができないが、深さ80mの井戸の水はそのまま生で飲むことができる。ちなみに、「梁大爺」(誰?)の家の井戸は深さが44mあり、井戸掘りの費用は2,000元だった。なお、普段は、電動ポンプで井戸の水を汲み上げるが、その電気代はそれほど高くない。

(2) W村1

聞き取り対象者：ZLY(写真1を参照)

聞き取り日時：2015年9月15日(火) 14:25～15:45

聞き取り場所：W老年活動中心(W幸福院)

聞き手：弁納才一・盧珺・安地雅博・佐々木麻衣

通訳・記録：盧珺

ZLYの個人史

- ・ZLYは、子年(1948年)生まれで、2015年9月現在、68歳になった。1955年(8歳)にW小学校に入学し、6年間学び、さらに、1961年にW初級中学(現在のW新民居あたりにあった)に入学し、1年間学んだ。1年間しか学ばなかったのは、3年困難時期に当たっていたためであろうか。
- ・1963年、大水害が発生し(「7天7夜下雨不停」)、中学校の校舎が破壊されたので、その後、姚山中学に入り直して1966年まで学んだが、文革が始まったので、学校では試験が行われなくなった。
- ・1966年、紅衛兵として北京・上海・南京・天津を訪問した。計3回、北京に行き、そのうち、最初の2回は鉄道を利用したが、最後の1回は徒歩で行った。全国各地に紅衛兵のための「接待站」があり、サインをすれ

写真1. (左側から)筆者・ZJB・ZLY・安地雅博・佐々木麻衣



ば、ただで食べたり、宿泊することができた。

- ・1967年以降、本村に戻って農業に従事した。その当時は、W生産大隊の下には13の生産小隊があり、その中の第12生産小隊(小隊長はZSY, 社員は約180人)に参加し、1人当たり1.5畝の土地に主に玉蜀黍・小麦・粟・山芋を植えた。そして、第12生産小隊は1972年から3つの小組に分かれたが、その会計を担当した(詳細は不詳)。また、当時、1人当たりの「公糧」(穀物で納める農業税)は80斤で、玉蜀黍の買付価格は1斤当たり0.07~0.08元にすぎず、農業税を控除すると、農民にはほとんど収入が残らなかった。

家族史

- ・父はZHRで、母はZLY(坝子口の出身)だが、両親はすでに死去しており、両親についてはほとんど記憶がない。

- ・私(ZLY)は、姉と弟の3人きょうだいで、姉のZLHは戊年(1946年)生まれで、垣子口に嫁ぎ、2015年9月現在、70歳になった。また、弟のZLSは卯年(1951年)生まれで、2015年9月現在、65歳になった。そして、その長男夫婦が本村で6畝の土地に玉蜀黍・小麦などを植えて1畝当たり1,000元の純収入を得ており、一方、その次男は、石家荘市で働いている。
- ・私(ZLY)には、2人の娘と1人の息子がいる。長女のZWY(亥年生まれ、45歳)は、山西省大同市の徐華俊(タクシー運転手)に嫁いだ。また、次女のZWY(丑年生まれ、43歳)は、江蘇省徐州市の中国鉱業大学で学んだ後、北京市の人民大学大学院で学び、元軍人の孟偉(結婚した当時は、北京市党校に勤務)に嫁ぎ、2015年9月現在、北京市昌平区「計生」(計画出産)委員会に勤務している。一方、長男のZWC(寅年生まれ、42歳)は、北京市で「打工」(臨時工)として働いており、その妻(霍麗霞、陝西省西安市の出身)は、本村で5畝の土地に玉蜀黍・小麦を植え、それを村外から来た人が家の庭先まで買付に来ている。なお、2015年の1斤当たりの買付価格は、玉蜀黍が1.03元、小麦が1.15元だった。

3年困難時期

- ・本村では、1960～62年の困難時期に加えて、1963年に大水害が発生したために、合わせて4年間、深刻な食糧難に陥った。だが、本村では、この時期に餓死者は1人もいなかった。
- ・1960年、「口糧」(玉蜀黍・小麦・甘藷・大豆・山芋)は1日につき1人当たり4両にすぎず、全く足りなかったため、白菜の根・尖草の根(「米根」)、苦菜、木の葉、玉蜀黍の芯なども食べた。
- ・1963年の大水害では、本村から50km離れた西大洋水庫(保定市のダム)が決壊した。2015年現在、西大洋水庫(保定市管轄)と王快水庫(河北省管轄)が保定市に飲用水を供給している。

村の経済概況

- ・本村における1斤当たりの買付価格は、小麦は、2013年が1.05～1.11元、2014年が1.27～1.29元、2015年が1.15元だった。また、鶏卵は、2013年が5.4元、

2014年が3.7～3.8元(3.3元や3.5元の時もあった)、2015年が4.4～4.5元だった。

- ・近年、本村内では、蔬菜は栽培していないので、本村内の「集市」で蔬菜を買って食べている。旧暦の毎月5日・10日・15日・20日・25日・30日朝6時頃から正午頃までにW新民居付近の学校の南側で市(「集市」)が立つ。

(3) W村 2

写真 2 . LMX

聞き取り対象者：LMX(写真 2 を参照)

聞き取り日時：2015年9月16日(水)

10:10～11:15

聞き取り場所：W老年活動中心(W幸福院)

聞き手：弁納才一・盧珺・安地雅博
通訳・記録：盧珺



個人史

- ・私は、東北のハルピンで1943年(未年)に生まれ、2015年9月現在、73歳になった。
- ・1949年(8歳)、家族みんなでハルピンから本村に戻ってきて、1950～56年の6年間、W小学校で学び、ついで、1956～59年、北城中学(北城村は本村から約6km離れている)で学び、さらに、1959～62年、姚山中学(高中)で学んだ。
- ・1963～64年、本村(人民公社生産隊)で農業に従事し、1964年末に人民解放軍に入隊し、1968年に「退伍」(除隊)した。
- ・1969年8月から、下郷工作隊で「工作」を行い、1970年3月～4月、退伍軍人弁公室に勤務し、1970年4月～1973年、県政府の審査幹部弁公室に勤務した。

家族史

- ・父(LYZ, 1902年生まれ、1980年に死去)は、土地改革時に下層中農とされた。ただし、私(LMX)は、祖父(LLX)と祖母には会った記憶がない。
- ・父のきょうだいは6人で、すでに全員が死去した。そのうち、一番上の

姉(「大姑」)には4人の子供がいて、そのうち2人の息子はハルビンで生まれ、1人は本村にいたが、すでに死去し、もう1人は石家荘市にいる。また、上から二番目の姉(「二姑」)には5人の息子と1人の娘がいる。なお、上から3番目の姉(「三姑」)には会ったことがない。

- ・父の兄(「伯父」)には3人の子供がおり、2人の息子は東北のハルビンと宜春で働いていたが、すでに死去し、もう1人の娘(90歳余り)は大王村に嫁いだ。また、父の弟(「叔叔」)には2人の子供がおり、息子(76歳)は本村で教師をやっていたが、すでに定年退職し、娘はハルビンに嫁いだ。すでに死去した。
- ・解放前、我が家は、父の姉である「大姑」と「二姑」の夫婦たちとともに、「逃荒」(自然災害などから逃れる)のために、ハルビンへ避難し、農業に従事し、石炭を積載したトラックが通過した後に道路に落ちていた石炭くずを拾って燃料としていたが、生活は本村に比べると苦しかった。私(LMX)と弟は、ハルビンで生まれた。
- ・母(「辺女」(辺氏の娘という意味か?))、1907年(未年)生まれは、姚山鎮西韓童(本村から約10km離れている)の出身で、1980年に死去した。
- ・私(LMX)は、もともと8人きょうだいだったが、幼い頃、すでに5人が死去し、残ったのは姉・兄・私の3人だけだった。
- ・兄のLSQは、1934年(戌年)生まれで、1950年、ハルビンの土木建築工程学校で学び、1959年まで同校の「団委」(共産主義青年団委員会)書記を務め、1959～63年、河北省の工業を支援するために邯鄲蜂鋏務局王風煤鋏で「電工」(電気工)を務めた。その後、1963年に本村に戻ってから(この時、都市戸籍から農民戸籍に戻った)は、「電工」(主に「接電」(電報の受け取り)や「澆地」(灌漑)用の電気の管理)をやっていたが、2012年に死去した。そもそも、兄のLSQは妻(苗素晴、邯鄲の出身)と1959年に邯鄲で知り合って結婚したが、1963年には離婚し、兄だけが本村に戻ってきて、息子は元妻と邯鄲で暮らしている。
- ・姉のLCZは、1940年(辰年)生まれで、保定市S県G鎮亭西庄(本村から約5km離れている)の劉恵賢(73歳、3畝の土地を所有)に嫁ぎ、4人の子供がいる。

(4) W村 3

聞き取り対象者：ZLY(9月15日午後・写真1を参照)

聞き取り日時：2015年9月16日(休) 14:20~15:50

聞き取り場所：W老年活動中心(W幸福院)

聞き手：弁納才一・盧珺・安地雅博

通訳・記録：盧珺

個人史

- ・1967~72年、第12生産小隊に参加し、W県站近辺の鉄道の線路の保守点検を行う「養路工」(第12生産小隊から私・弟・叔父の息子の3人と第4生産小隊から1人の計4人が参加)をやり、1日当たり1.8元の手間賃をもらい、その手間賃のうち、0.5元を第12生産小隊に渡し、その見返りとして10の「工份」(労働点数)をもらった。当時、自宅から自転車ですべて完県站付近まで通勤し、昼ご飯は自宅から持参した饅頭や烙餅を食べた。なお、1972年以降については全く話しを聞いていない。

家族史

- ・父(ZHR)の兄には2人の娘(ZCFとZQF)がいたが、男の子供がいなかったため、甥っ子の私(ZLY)がその家の跡を継ぐ男子として養子に入った。
- ・父の母(韓氏)は、本村から約10km離れた望都県小下叔村の出身で、1967年に81歳で亡くなった。
- ・私の父は姉・弟の3人きょうだいで、父の姉(ZHG)は埧子口の彭春(92歳、6~7畝の農地を所有)へ嫁ぎ、2人の息子(PSK・PSJ、各3畝の農地を経営)と3人の娘がいる。この3人の娘のうち、長女のPJQはS県城東の関村の農家に嫁ぎ、次女のPJHは同県城東の李千戸村の農家に嫁ぎ、三女のPJXは満城県決堤村の農家に嫁いだ。また、父の弟(ZDH)は、1958~64年、第6生産大隊長を務め、もともとW村には6つの生産大隊があったが、1964年に13の生産小隊に分かれ、1964~78年、第12生産小隊長を務めた。

生産小隊

- ・1年に2回(6月末と年末)決算した。生産小隊の食糧の分配方法は、7割を人口に応じて、また、残りの3割を「工份」に応じて分けた。
- ・配給された「布票」は、老若男女を問わず、1年で1人当たり1.2丈(1丈=3.3m)だった。大人の上下の衣服は1.5丈の布地を必要とし、1.2丈であれば子供の上下2着分を作ることができた。
- ・当時、本村では、1戸当たり、1～2匹の豚、8～10羽の鶏、5～6羽の鴨を飼育していた。また、豚の糞を生産隊に手渡すと、1m³当たり50の「工份」と交換することができた。一般的な「猪圈(豚小屋?)」では2ヶ月で3～4m³の豚の糞が溜まった。春節の時には、豚を殺して食べるが、1匹の豚を殺すと2元の屠殺税がかかり、豚を屠殺する者に対して10元を支払った。本村には5人の屠殺業者がいたが、その出身階級は「中農」で、普段は農業に従事している。そして、この5人の家は、代々、屠殺業を営んでおり、解放前は豚肉販売店を経営していた。なお、各生産大隊には2台の運搬用の「大車」があり(これを牽く2頭の馬と2頭の驢馬がいた)、その他の「小車」は全て個人のものだった。畜糞の運送では、1日当たりの「工份」は10だった。

(5) W村4

2015年9月16日、W老年活動中心における聞き取りを終了した後、安地雅博が、W老年活動中心のすぐ近くにある、かつてのW小学校(写真3を参照)に老夫婦が住んでおり、少し話を聞いたと伝えてきた。ただし、昔のことを話してもよいが、W老年活動中心には行きたくないと言っているということなので、筆者と盧珺・安地雅博の3人でさっそく訪問してみた。

LDX(写真4を参照)は、元W小学校で教師をやっていたことから、2015年現在、同小学校校舎の管理も兼ねて居住しており、作業場のようなところで手作業で椅子を作っていた。作った椅子は販売しているようである。

写真3. W学校(旧W小学校)



写真4. LDX



(6) 河北省定州市楽亭鎮翟城村

2015年9月17日、河北大学の鄭清波の出身地である定州市を訪問した。そもそも、中華民国時期には、定県(現在は定州市)は、晏陽初らが展開した郷村建設運動の拠点として有名であり、また、河北省の中では高陽県や宝坻県とともに土布(手織り綿布)の生産地としても知られていた。今回、定州市楽亭鎮翟城村では、事前に地方政府に連絡を取ることなく、たまたま同村内の路上にいた4人の老人たちに対してゲリラ的に短時間の極めて簡単な聞き取りを行った。

聞き取り対象者：HCL(辰年生まれ、75歳)、WZJ(子年生まれ、80歳)、
MGZ(未年生まれ、85歳)、HYK(申年生まれ、84歳)

聞き取り日時：2015年9月17日(木) 11:40~12:00

聞き取り場所：定州市楽亭鎮翟城村内の路上

聞き手：弁納才一・祁建民

通訳・記録：盧珺

3年困難時期

・当時は、極度の食糧不足のために、「浮腫病」にかかった人が多かったが、

本村で餓死者が出たという話は聞いたことがない。本村の「食堂」では、主に甘藷や山芋を食べた。また、食糧を求めて村外から本村へやってきた人はいなかった。

解放前の状況

- ・本村では、解放前、棉花を植えていたが、晏陽初が棉花試験場を設立して品種改良を行い、また、豚の品種改良も行い、さらに、祠堂の中に小学校を建て、平民教育を実践していた。
- ・本村の婦女子は、かつてはみな紡糸・織布を行っていた。手織りの綿布は粗布で、その粗布を使って自分で衣服を作った。当時(解放前?)、染布は主に白布を黒色や青色に染め上げた綿布だった。なお、集団化時期には棉花栽培が任務とされていたので、棉花を植えていたが、請負制が始まってからは、虫害がやや多かったので、棉花を栽培しなくなった。
- ・抗日戦争時期、八路軍によって地下道(現在は雨水によって全て塞がってしまった)が作られ、一方で、日本軍によって「炮楼」が作られた。また、本村には八路軍もやってきた。なお、日本兵は、本村で40人の男を殺害した。

現在の農作物

- ・2015年現在、本村では、一般的に落花生・玉蜀黍(夏作)・小麦(冬作)の輪作を行っている。

(6) Q県Z鎮Z村

聞き取り対象者: YZH(写真5を参照)

聞き取り日時: 2015年9月18日(金)

14:40~15:45

聞き取り場所: Z村YZH宅

聞き手: 弁納才一・鄭清波・
盧珺・安地雅博

通訳・記録: 盧珺

写真5. YZH



個人史

- ・YZH(本名はYX, 別名は宝柱)は、子年(1924年)生まれで、現村長の父親であり、2015年9月現在、92歳である。ただし、耳が遠くなっている上に、記憶もかなり不鮮明になっている。
- ・8歳(1931年)から5年間、本村の小学校で学び、1936年に50~60人からなる児童団(民兵)を自主的に組織してその団長を務めて見張り番(哨兵・歩哨)となり、1938年から地方政府(同県長の劉大慶は中国共産党員だった)の中国共産党軍(八路軍)に入隊した。抗日戦争時期は、晋察冀革命根拠地二分区司令部(司令は俞全声)の参謀処(参謀長は張真)で記録係を担当した。
- ・1945年に中国共産党に入党し、その後、河北省公安司令部が設立した「教導」大隊で働いたが、しばらくして、青海省石油勘探局(柴達木)に転職し、チベット動乱の時、その制圧に参加したが、自分1人だけが生き残ったので、党組織との関係も途絶えてしまった。そして、ソ連が「撤走」(技術者の引き上げ)した時、青海省石油勘探局の大部分の幹部が東北に移り(転勤、配置換え)となったが、私は高山病に適應できなかったため、本村に帰された。こうして、本村に戻ってからは、生産隊で働いた。主に「看地」(農産物の盗難防止の見張り)を行い、1日当たりの「工份」は8だった。また、文化大革命後期(1972~76年?)には林場の場長を務めた。

家族史

- ・父のYYHは、卯年(1903年?)生まれの一人っ子で、解放前は10畝余りの土地を所有する農民だった。また、母のLXは、本村から約2.5km離れているZ鎮北合庄の出身だった。
- ・妻のWYRは、本村の北街に生まれ、2015年9月現在、88歳になった。ただし、痴呆症状が見られ、ほとんど寝たきり状態となっていた。
- ・私(YZH)には、2人の息子がいる。長男(YJG)は、1961年生まれで、2015年9月現在、村の幹部(村長)をやっている。また、次男はYJZである(詳細を聞くことはできなかった)。

人民公社

・Z鎮の人民公社の下には6つの生産大隊があり、本村には1つの生産大隊(100戸余りで組織)があり、さらに、その生産大隊の下には35の生産小隊(1つの生産小隊は約30戸で組織)があった。なお、2015年現在、本村の人口は約7,600人で、土地は7,321畝である。

3年困難時期

・1963年は、大水害が発生し、最も困難な年で、木の皮や草の根を食べたが、本村では餓死した人も多かった。また、主に河南省や安徽省から食べ物を求めて本村へやってきた人も多かったが、本村でも1959～69年は基本的に食べ物がなく苦しかったという。

II. 聞き取り調査－山西省L県N鎮G村

2015年9月23日(水)、山西省L県のホテル(山西宏源国際飯店)を8:00頃に出発し、9:00頃にはG村に到着した。そして、かつてのG小学校の敷地内にあるG村の村民委員会で弁納才一・祁建民・田中比呂志の3人を代表とする3つのグループに分かれて話を聞くことになった⁴⁾。そもそも、今回は、3人の老人に来ていただくようお願いしていたが、実際に同村民委員会に集まって来た老人は、年齢順にLZZ(84歳、申年生まれ)・LZY(82歳、戌年生まれ)・LNF(78歳)・LZX(75歳、巳年生まれ)・LZQ(70歳、戌年生まれ)・LFS(63歳、巳年生まれ)の計6人だった。このうち、LZZ・LZY・LZX・LZQの4人は同じ「輩行」(世代)で、広義の兄弟である。また、テーブルの上には、バナナ・ミカン・リンゴなどの果物と御茶が準備され、我々を迎えてくれた(写真6を参照)。もとより本村にはL姓が非常に多いことは、前回までの調査で確認している。なお、現村長(LXH, 48歳)の祖父(LRH, 生年月日・干支などは不明)は、抗日戦争時期に日本兵に殺されたという。

(1) G村 1

聞き取り対象者：LZY・LZZ(写真6を参照)

聞き取り日時：2015年9月23日(休) 9:15~11:15

聞き取り場所：L県N鎮G村村民委員会

聞き手：弁納才一

通訳：毛来靈

LZYの個人史

・1934年(戌年)、河南省安陽地区内黄県碾頭村で呉冬雪(生年月日・干支などは不明)の末っ子(4男)として生まれた。その当時は、主に河南省の農村からは多くの人がG村に隣接するF炭坑へ働きに来ていた。そもそも、黄河の近くにある碾頭村は、しばしば水害に見舞われ、貧しい村だったので、やはりF炭坑へ働きに来る農民が多かった。私(LZY)の元々の実家は子供が多く、貧しく、末っ子の自分を養育することが難しかったの

写真6。(左側から)LFS・LZQ・LZX・LXH(村長)・LZZ・LZY



で、8歳の時(1942年?)、碾頭村からF炭坑へ働きに来た同村民と一緒にFにやって来て(鉄道でまる1日かけて「三等站」のF站到着)、碾頭村の養子縁組を世話する女性の紹介によって、G村のLZFの養子となった(詳細は後述の「LZYの家族史」を参照)。なお、G村の農民が隣接する農村であるF村の炭坑で働くことはなかった。

- ・ 8歳(1942年?)、G村の小学校に入学し、4年間(1945年まで)学び、その後、本村の高級小学で4年間(1946~49年?)学んだ。
- ・ 1953~54年頃、5~6戸の農家と互助組に参加し、1956年から初級合作社、また、1958年から高級合作社に参加した。1956~66年、G管理区(後に生産大隊)の会計を務めた。
- ・ 本村では、1960~63年の「困難時期」のうち、1963年は旱魃が発生したために、最も苦しく、当時は、玉蜀黍の芯などから採った澱粉で作った団子の他に、木の芽・皮・葉などや野草も食べた。なお、当時、河南省から多くの人が食糧を求めて本村にやってきた。

LZYの家族史

- ・ 河南省の実父(呉冬雪、生年月日・干支などは不明)は農民で、実母の名前はわからない。元々の実家については、まだ幼かったので、ほとんど記憶がない。
- ・ 父のLZF(生年月日・干支などは不明)は、土地改革前には10畝前後の土地を所有する農民で、主に小米(粟)を栽培し、母(ZYL、張家庄の出身)との間には1人の娘(LQL)しかいなかったため、私(LZY)が8歳の時にLQLの弟(その家の跡継ぎの男子)として養子に入った。

LZZの家族史

- ・ LZZの父はLMD(生年月日・干支などは不明)で、祖父(LMDの父)はLCYである。一方、LZX・LZQ(LZXの弟)の父はLMJで、祖父(LMJの父)はLSY(LCYの弟)である。

(2) G村 2

聞き取り対象者：LZX・LZQ

聞き取り日時：2015年9月23日(休) 13:35～14:45

聞き取り場所：G村委

聞き手：弁納才一・古泉達矢・安地雅博

通訳：毛来霊

LZXの家族史

- ・私(LZX)は、1人の弟(LZQ)と3人の妹(HA・SA・SA)の計5人きょうだいで、すぐ下の妹のLHA(1950年の寅年生まれ)は本村人のWQR(亥年生まれ、69歳)と結婚した。
- ・私の妻(WGY、生年月日・干支などは不明)は、N鎮圪老窟の出身で、すでに死去した。
- ・私には、2人の息子(HB・YB)と2人の娘(DF・RF)の計4人の子供がいる。長男のLHB(1963年の卯年生まれ、52歳)は、「打工」をしており、その妻(尹春英)は壇鎮郷恋翠の出身である。また、次男のLYB(40歳代)は、本村の「洗煤廠」で石炭を「装載機」で輸送用トラックに積む仕事をしており、その妻(王小英)は壇鎮郷楊家山村の出身で、専業主婦である。一方、長女のLDF(40歳代)は、夏門鎮火山村の劉文彦に嫁いだが、本村に戻ってきて聚仙飯店を借りて経営している(我々は今回も昨年と同様にこのレストランで昼食を取った)。また、次女のLRF(40歳代)は、N鎮南関村の王梁根に嫁ぎ、数年前から豆腐店を経営している。なお、三女がいたが、妻(WGY)の目が悪くなってからは育児をするのが難しくなったので、まだ幼い頃、仁義郷道遷村へ養子に出した。

LZQの家族史

- ・私(LZQ)には、2人の息子(RBとRB)と2人の娘(RFとRF)の計4人の子供がいる。
- ・長男のLRB(酉年生まれ、46歳)は、トラック運転手をやっており、その妻(劉翠紅、44歳)は、本村から約10km離れている壇鎮郷上村の出身で、

本村から約20km離れた順平県城内の商店でアルバイトをしているが、その実家は農家だった。また、次男のLRB(巳年生まれ、38歳)は、トラック運転手をやっており、その妻(趙麗霞、生年月日・干支などは不明)は、梁家場郷茹泊村の出身で、実家は農家だった。

- ・長女のLRF(子年生まれ、43歳)は、交口県回龍鎮桃山村の尹明貴(実家は農家で、2015年現在、回龍鎮の賃貸アパートに住み、「打工」をやっている)へ嫁いだ。
- ・次女のLRF(寅年生まれ、40歳)は、本村人のYHに嫁ぎ、夫婦ともに汾西鋳務局南関発電廠で働いている。なお、YHの父(Y玉生、年齢・干支などは不明)は、元々、同上の発電廠で働いていた。
- ・私(LZQ)は、2015年9月現在、依然として本村の会計を務めているが、もうすでに高齢なので、今年度中には引退したい。

(3) Y村

2015年9月22日(火)午後、Y村の元村長で、2015年9月現在も、Y村の社首であるWBH⁵⁾の自宅を訪ね、この1年の変化について話しを聞いた。

昨年(我々が前回訪問した2014年8月以降?)から、リンゴを栽培する数戸の農家によってリンゴを共同出荷する合作社(地方政府への申請登録済みだった)が立ち上がっており、近いうちにリンゴの共同出荷のための冷蔵倉庫も建設する予定だという。なお、詳細は、祁建民が整理することになっている⁶⁾。

III. 参観地

(1) 河北省高陽県

2015年9月15日(火)夕方、W村において聞き取り調査を終えた後、高陽県内の農村の出身であるというマイクロバスの運転手に高陽県内の様々なところを案内してもらった。

まず、農村の市場を参観した後、紡織工場「双徳紡織品有限公司」(写真7-1・写真7-2を参照)を参観したが、その原料綿糸は全てウズベキスタン

写真7-1. 「双徳」紡織工場



写真7-2. 高陽県内の紡織工場



から輸入しており、一方、その製品は主に国内向けであるという。なお、同敷地内で飼育している家畜か家禽の匂いが立ち込めていた。

その後、マイクロバスの運転手が自宅(その裏の敷地か?)で飼育しているという馬を見に行き、さらに、解放前にフランスへの「勤工儉学」の準備をするための学校だったとされている布里留法工芸学校(写真8-1・写真8-2を参照)を参観した。そこでも、参観料金を徴収されることはなかった。

なお、翌16日(水)夕方、W村において聞き取り調査を終えた後、保定市内の禅寺、天主教の教会、鐘楼などを参観した。ここでも、参観料金を徴収されることはなかった。

写真8-1. 留法工芸学校の正門



写真8-2. 布里留法工芸学校



(2) 河北省定州市

2015年9月17日(木)午前、保定市のホテルから車で1時間半ほどかけて定州市(旧定県)を訪問した。まず、仏教と道教が融合した白蓮教と縁のあるという寺廟を訪れ、ついで、楽亭鎮翟城村では晏陽初の郷村建設学校を参観した(写真9-1を参照)。その正門を入ってすぐのところには、晏陽初の胸像とその背後の壁には「九大信条」があった(写真9-2を参照)。

写真9-1. 郷村建設学校の正門



写真9-2. 晏陽初の胸像と「九大信条」



写真9-3. 翟城村民委員会



写真9-4. 晏陽初展覽室



写真10. 清真寺



写真11. 定県文廟



写真12. 定州貢院



写真13. 開元寺塔



写真14. 定州城門(南門)



その後、同日昼、定州市楽亭鎮翟城村民委員会(写真9-3を参照)の前に駐車し、祁建民と筆者の2人がその中に入って行ったが、昼休みだったためであろうか、入り口(正門)で誰何されることもなかったものの、同村民委員会2階の晏陽初展覽室(写真9-4を参照)には鍵が掛けられており、参観することはできなかった。

同日の午後は、定州市内の清真寺(写真10を参照、イスラム寺院)・定県文廟(写真11を参照、孔子廟)・定州貢院(写真12を参照、かつて科挙試験が行われた場所)・開元寺塔(写真13を参照)・定州城南門(写真14を参照)などを参観した。同城門の近くには、多くの露天商があり、また、同城門外にも様々な店が建ち並んでいた。ちなみに、定県文廟の入場料は1人当たり10元だったのに対して、定州貢院の入場料は1人当たり20元だった。定州貢院の

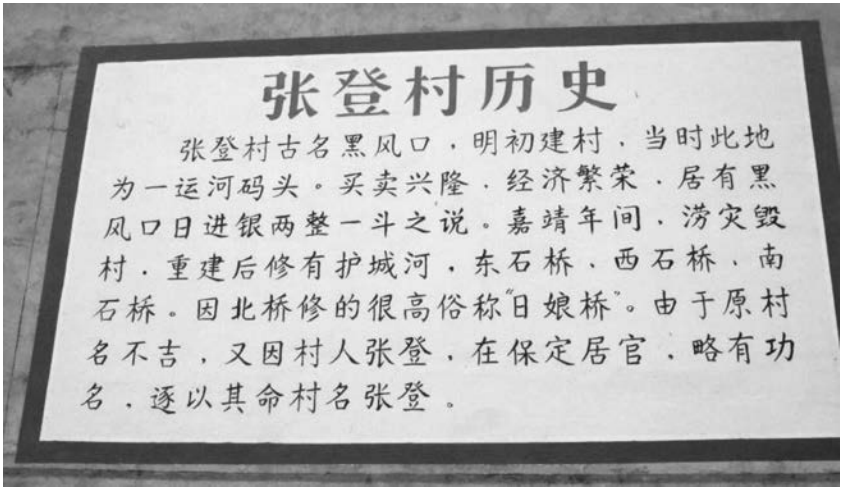
屋内の出入り口を入ってすぐのところには、江沢民(元中国共産党総書記)が訪問した際に着席したという椅子が展示されていた。

そして、その日、最後に立ち寄った土布店では、期待していた定州(定県)産の土布は全くなく、山東省産の土布が売られていた。

(3) 河北省清苑県張登村

2015年9月18日(金)早朝、翌日からのシンポジウム会場となるホテル(4つ星の華中假日酒店)へ移動し、9:30頃に同ホテルを出発し、約1時間で張登村に到着し、まず昨年8月に訪問したスイカの卸売市場⁷⁾を再び参観し、ついで、今回は、蔬菜の冷蔵倉庫も参観した。

写真15. 広場の壁に掲げられた張登村の歴史



その後、本村の廟(前回の2014年9月も参観)とともに、最近、本村の中心部に造営された広場の壁に掲げられていた張登村の歴史を見た(写真15を参照)。

そして、今回、新たに参観した廟が同村の土地廟(写真16-1・写真16-2を参照)である。この廟を管理している人に鍵を開けてもらった。

写真16-1. 土地廟



写真16-2. 土地廟の内部



おわりに

これまで、例年、中国では、8月15日と9・18事変(満州事変)が勃発した9月18日前後には反日気運が盛り上がっていた。だが、今年(2015年)は、すでに9月3日に抗日戦争勝利記念のイベントと軍事パレードを大々的に行ったせいであろうか、9月18日当日は特に何かセレモニーがあるわけでもなく、極めて静かだった。昨年度とは雰囲気が一変していた。これは、習近平による整風運動が収束を迎えつつあるということを反映しているのかもしれない。

一方、今回の華北農村聞き取り調査を無事に終えて、河北省保定市近郊農村(S県G鎮W、Q県Z鎮Z村)では、来年度はもう少し聞き取り時間(日数)を延長することが可能かもしれないという感触を得た。また、山西省L県N鎮G村では、当初の想定以上の聞き取り対象者が集まって来てくれており、次回の聞き取りでも来てくれそうである。さらに、山西省Y村でも、来年度は社首以外の人(リング販売の合作社を立ち上げた人)にも話しを聞くことができそうである。

いずれにせよ、今回の華北農村における聞き取り調査を比較的順調に実施することができたのは、河北大学及び山西大学の諸先生方と研究分担者の祁建民による周到な事前準備のおかげであり、ここに改めて関係各位に謝意を表しておきたい。

注

1) 詳細については、筆者・祁建民・田中比呂志・河野正などがそれぞれ中心となって調査内容をまとめた以下のものを参照されたい。

①拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月, 山西省太原市・霍州市農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月, 山西省太原市・霍州市・平遙県農村」(北陸史学会『北陸史学』第57号, 2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月, 山西省P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月, 山西省P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号, 2012年12月)・同「華北農村訪問調査報告(8)－2013年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第34巻第1号, 2013年12月)・同「華北農村訪問調査報告(9)－2014年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号, 2014年12月)。

②三谷孝・内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号, 2010年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(2)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第12号, 2011年12月), 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(3)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第13号, 2013年1月), 内山雅生・河野正・前野清太郎・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(4)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第14号, 2014年1月), 内山雅生・菅野智博・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(5)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第15号, 2015年1月)。

③田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第62集, 2011年1月), 河野正・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(2)－2010年8月・12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第63集, 2012年1月), 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(3)－2011年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月), 福土由紀・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(4)－2012年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月), 田中比呂志・孫登洲・古泉達矢「華北農村訪問調査報告(5)－2013年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第65集, 2014年1月), 河野正・前野清太郎・古泉達矢・内山雅生・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(6)－2013年8月・2014年8月, 山西省L県G村・D県Y村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第66集, 2015年1月)。

- ④河野正「華北農村調査の記録－2013年8月、山西省P県D村の聞き取り記録－」(『東洋文化研究』第16号, 2014年3月), 河野正・前野清太郎・佐藤淳平「華北農村調査の記録－2014年8月、山西省L県G村の聞き取り記録」(学習院大学『国際研究教育機構研究年報』第1号, 2015年1月)。

また、山西大学中国社会学史研究センター側の調査内容をまとめたものとしては、行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎(弁納才一訳)「山西省農村調査報告(1)－2009年12月、P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月), 郝平・常利兵など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告－2010年7月・8月・12月、P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第63集, 2012年1月)を参照されたい。

- 2) 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(海外学術調査))平成25年度～平成29年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者: 弁納才一)。なお、その調査の成果については、拙稿「華北農村訪問調査報告(0)－2014年9月、北京市・河北省・山東省の農村」(『金沢大学経済論集』第35巻第2号, 2015年3月)を参照されたい。
- 3) 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(海外学術調査))平成27年度～平成31年度「個の自立と新たな凝集力の中で変貌する現代農村社会システムに関する史的研究」(研究代表者: 内山雅生)。
- 4) 古泉達矢・菅野智博・盧珺・鄭翠梅・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(7)－2015年9月、河北省S県W村・山西省L県G村－」(『東京学芸大学紀要(人文社会学計II)』第68, 2017年1月刊行予定), 祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(6)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第16号, 2016年1月刊行予定)を参照されたい。
- 5) 前掲, 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(3)」264頁, 及び, 前掲, 内山雅生・菅野智博・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(5)」194～195頁を参照されたい。
- 6) 前掲, 祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(6)」。
- 7) 前掲拙稿「華北農村訪問調査報告(0)－2014年9月, 北京市・河北省・山東省の農村」17～18頁を参照されたい。

補記) 本稿は、科学研究費助成事業(基盤研究(B)(海外学術調査))平成25年度～平成29年度「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者: 弁納才一, 課題番号25301029)による研究成果の一部である。